「日々の理科」（第 2207 号）　2020,-7,27

「ヤグラタケ（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

キノコの世界には、もともとおかしな生活をしているものが多い。たとえば、「タマハジキタケ」というキノコは、うつわ状の菌体の中に、胞子の詰まった「弾丸」がたくさん入っていて、それを四方八方にまき散らして胞子を拡散する。まさに「玉弾き茸」である。

「キヌガサタケ」（画；C.Tanaka）

「キヌガサタケ」というキノコは、竹林に発生し、まるでヘビの卵のような「幼菌」を破って子実体が現れ、数時間で成長、白く美しいベールをまとう。その優美な姿から「キノコの女王」とも呼ばれる。実際には幼菌（卵）の中に子実体が押し縮められていて、それが「びっくり箱」のように伸びてくる。「成長」というよりは「展開」といったほうが合っている。頂上部の「帽子」には黒い粘液に覆われた胞子塊が付き、これが非常に臭い。ハエに胞子を運ばせるのだ。またベールは、雨で流された胞子を拡散させる役割がある。

もともと「変わり者」が多いキノコ（担子菌類や子嚢菌類）の仲間でも、「変わり者の中の変わり者」が「ヤグラタケ」だろう。ヤグラタケはズバリ「キノコの上に生えるキノコ」である。

キノコはその名の通り「木の子」である。写真はアカマツの根元に発生した「クロハツ」というキノコ。漢字では「黒初」と書く。初夏に多く見られ、キノコシーズンの最初に発生するので「初茸」なのだ。ほかにも「シロハツ」「ニオイベニハツ」「ウズハツ」など非常に種類が多く、食用になるものもある。

「クロハツ」　*Russula nigricans* ／ 北軽井沢

クロハツはアカマツの根元を好む。一本のアカマツを取り囲むように、群生することが多い。比較的大型で、傘の裏の「ヒダ」が「疎」で、肉質は硬いが、脆く崩れやすい。似たようなキノコに「クロハツモドキ」*Russula densifolia* があるが、肉質が強靭で、傘の裏側の「ヒダ」もずっと「密」なので見分けがつく。この「クロハツ」や「クロハツモドキ」の傘の上が、今回の主役「ヤグラタケ」の成長場所となるのだ。